

23 華岡青洲自筆「丸散便覧序」

高橋 均

華岡青洲は、宝暦十年に紀州藩上那賀郡名手荘西野山村平山で生を享けた。天明二年から天明五年にかけて、京都に遊学し、古方医学派の大家である吉益南涯と和蘭流（カスパル流）外科医の大和見立に師事した。その後、紀州へ帰郷し、研鑽を重ねて文化元年十月十三日世界に先駆け、麻沸散を用いて全身麻酔下乳癌摘出術を施行したことで日本国中に名前が知られ、多くの門下生を指導した。本発表で取り上げた「丸散便覧序」は、寛政二年に青洲自身で著述したことがその序文からわかる。

丸散便覧は青洲が師事した吉益南涯とその父吉益東洞の提唱した萬病一毒の説・気血水の学説に則った古方医学派の便覧を青洲が自分自身の学説に則り、書き改めたものである。丸散便覧の門人伝書本は、高橋 震氏が所蔵している。この書物には、青洲の門人が書写した華岡青

洲撰の序がみられる。その内容は、自筆本と全く同様であり、寛政二年、庚戌、九月望の期日がしるされておおり、門人が広くこの書物を華岡流の医術書として伝書していったことがわかる。本自筆本を発見された宗田 一氏によると、丸散便覧の序文は、天保十年と筆写された書物もあり、一部の伝書本では寛政二年であるとしている。しかし、自筆本の出現により、華岡青洲が著述を行ったのが、寛政二年であることが明らかとなった。

丸散便覧の著述を行った頃の春林軒塾の門人は、春林軒門人姓名録（和歌山県立医科大学所蔵）によると、父直道（二代随賢）時代からの門人を除くと、天明二年に入門した中川脩亭、寛政元年に入門した楠 又一、寛政二年に入門した湯浅養玄の三名のみである。このうち、中川脩亭は、青洲の門人というより、友人に近い存在であった。青洲の麻酔薬研究には、中川脩亭の協力は欠くべからざるものであり、麻酔薬の研究過程のわかる著述である「禁方拾録」（寛政三年）も青洲の口述内容を彼が筆記している。また、中川脩亭自身の著述である麻薬考には、華岡青洲がどのようにして麻沸散を開発したかの過程が

明瞭に示されている。華岡青洲の麻酔薬の研究は、寛政三年から八年にわたり、青洲の三十二歳から三十七歳であり、この時期にはすでに麻沸散はほぼ完成の域に近づいていたものと思われる。このことから、「丸散便覧序」で青洲がのべている一友人とはこの中川脩亭のことと考えられる。

「丸散便覧序」は、薬の使用法や病の治療法に関する青洲自身の考え方が表れており、誠に興味深い。ただし、この書物も刊本にはなっておらず、門人の筆録で筆写本として伝わったものである。多くの門人は、華岡青洲の丸薬と散薬の使用法を記した丸散便覧の部分は筆写しているが、序文の部分の筆写はほとんど見当たらない。私は、青洲自身の言葉で記述された序文の部分が最も重要であると考えている。この現代文に翻訳した論考を読み解くと、華岡青洲の薬物の処方に関する考え方がわかり、かれが提唱した内外合一・活物窮理の学説が眼前にみえてくる。そして、庶民に尊敬される名医として育つには、どのように医療を行えばよいかがわかる。現在のは、どのようにならなければならないか、彼の言葉を

胸に刻み込む必要がある。

(近畿大学医学部附属病院救急救命センター)